

病害虫発生予察情報(2月予報)

令和8年1月27日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (2月の県平均平年値)	予報の根拠
トマト	葉かび病・ すすかび病	発生量：少 (発病株率 6.5%)	1月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：低い (－) 降水量：少ない (－)
	灰色かび病	発生量：少 (発病株率 6.9%)	1月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：低い (－) 降水量：少ない (－)
	黄化葉巻病	発生量：少 (発病株率 1.8%)	1月中下旬発生量：少 (－) コナジラミ類発生量：少 (－) 気象予報：気温：低い (－)
	コナジラミ類	発生量：少 (寄生株率 8.5%)	1月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：低い (－)
たまねぎ	灰色腐敗病	発生量：並 (平年発生なし)	1月中旬発生量：並(発生なし) (±) 気象予報：気温：低い (－) 降水量：少ない (－)
	腐敗病	発生量：少 (発病株率 1.5%)	1月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：低い (－) 降水量：少ない (－)
	ネギアザミウマ	発生量：やや多 (寄生株率 27.9%)	1月中旬発生量：やや多 (＋) 気象予報：気温：低い (－) 降水量：少ない (＋)
レタス (非結球 レタスを 除く)	べと病	発生量：やや少 (発病株率 1.7%)	1月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：低い (＋) 降水量：少ない (－)
	斑点細菌病	発生量：やや少 (発病株率 3.1%)	1月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：低い (＋) 降水量：少ない (－)
いちご	灰色かび病	発生量：少 (発病株率 0.6%)	1月上旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：低い (－) 降水量：少ない (－)
	うどんこ病	発生量：並 (発病株率 0.6%)	1月上旬発生量：やや多 (＋) 気象予報：気温：低い (－)
	炭疽病	発生量：少 (発病株率 1.1%)	1月上旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：低い (－)
	アザミウマ類	発生量：少 ただし、中遠：やや多 (寄生株率 5.6%)	1月上旬発生量：やや少 (－) ただし、中遠：多 (＋) 気象予報：気温：低い (－)
	アブラムシ類	発生量：少 (寄生株率 1.7%)	1月上旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：低い (－)
	ハダニ類	発生量：やや少 ただし、中遠：やや多 (寄生株率 14.1%)	1月上旬発生量：並 (±) ただし、中遠：多 (＋) 防除員からの報告：やや多～多 (＋) 気象予報：気温：低い (－)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の1ヶ月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（＋）、少発要因の場合は（－）を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報
はこちら
で検索！



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準
<https://www.s-boujo.jp/>

静岡県病害
虫防除所 HP



静岡県病害虫防除所 HP
<https://www.pref.shizuoka.jp/sangyo/shigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>

2 予報の根拠と防除対策

【トマト】

<生育の概況>

生育は平年に比べやや遅れている。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・1月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は2.8%（平年9.7%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より少なく気温も平年より低いため、本病の発生を助長しない。しかし、例年12月以降は、ハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・葉かび病抵抗性品種（Cf-9）を侵すレース2.9の発生が県内で確認されている。このため、葉かび病抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い発生に注意する。
- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に撤去し、適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・1月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は1.0%（平年3.8%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より少なく気温も平年より低いため、本病の発生を助長しない。しかし、例年12月以降は、ハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ほ場外に撤去する。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。

●黄化葉巻病

予報の根拠

- ・1月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は0.1%（平年2.2%）と平年より少なかった。
- ・コナジラミ類の平均寄生株率は、7.5%（平年11.4%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より低いため、媒介虫であるタバココナジラミの発生を助長しない。このため、本病の発生も助長されない。

防除対策

- ・本病はタバココナジラミによって媒介されるため、タバココナジラミの防除を徹底する。防除対策については、コナジラミ類の項を参照すること。
- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・多発ほ場においては、耐病性品種の利用を検討する。なお、耐病性品種でも感染し、ウイルス密度が高まると発病するため、タバココナジラミの防除を徹底すること。

●コナジラミ類

予報の根拠

- ・1月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は7.5%（平年11.4%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より低いため、本種の発生を助長しない。

防除対策

- ・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
- ・葉裏における成幼虫の寄生状況を観察するとともに、黄色粘着板における誘殺数に注意し、発生が確認された場合は薬剤防除を実施する。

【たまねぎ】

＜生育の概況＞

生育は平年並で推移している。

●灰色腐敗病

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、鱗茎に発生は認められなかった（平年発生なし）。
- ・本病は多雨で発生が助長される。1か月予報では気温は平年より低く、降水量は平年より少ないため、本病の発生を助長しない。

防除対策

- ・降雨が続く場合は、薬剤散布により防除する。
- ・被害株やくず球は、ほ場付近に放置すると発生源となるため早期に取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

●腐敗病

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率1.1%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないため、本病の発生を助長しない。

防除対策

- ・本病は細菌病であり、凍霜害や暴風雨による傷口から侵入するため、傷んだ葉がある場合は、暴風雨の前後に薬剤散布を行い、予防や感染の拡大防止に努める。
- ・ネギアザミウマによる食害も本病の感染を助長するため、発生に注意し、本種の防除を実施する。
- ・発病株は感染源となるため、速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

- ・収穫後の植物残さは本病の伝染源となるため、1か所にまとめ、ビニールで被覆し菌を死滅させるなどして適切に処分する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、平均寄生株率 29.1%（平年 25.6%）と平年よりもやや多かった。被害程度を示す被害度は、18.4（平年 18.3）と平年並だった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より少ないが、気温は平年より低いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・気温が低い間は特に防除の必要はないが、気温が上昇すると活動が活発化するため、発生が見られるほ場では早めに防除を実施する。成幼虫ともに葉と葉の隙間に多く寄生しているので、寄生部位に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

＜生育の概況＞

生育はやや早い。

●べと病

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 1.5%）。
- ・1か月予報では、降水量は平年より少ないが、気温が平年より低いため、本病の発生をやや助長する（病原菌の生育適温は 10～15℃で、多湿を好むため、トンネル内が結露するような高湿度になると発生が多くなる）。

防除対策

- ・本病原菌は空気伝染するため、近隣のほ場で発生が確認されている場合は薬剤の予防散布を行う。
- ・初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・罹病残さはほ場外に処分する。
- ・トンネル内が多湿にならないよう換気に努める。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 2.0%）。
- ・1か月予報では、降水量は平年より少ないが、気温が平年より低いため、本病の発生をやや助長する（本病は比較的低温で多湿条件を好むため、トンネル内が結露するような高湿度になると発生が多くなる）。
- ・凍霜害は茎葉を傷めて病原細菌の感染を助長させるため、発生に注意する。

防除対策

- ・降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・トンネル内が多湿にならないよう換気に努める。

＜その他の病害虫＞

●ビッグベイン病

- ・ 1月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 1.9%）。
- ・ 本病は土壌中に生息する菌によって媒介される土壌伝染性のウイルス病である。そのため、発病株の見られるほ場の土を靴や農機具などにつけて他のほ場に持ち運ばないように注意する。また、発病株は根ごと取り除き、土壌中のウイルス保毒菌量を少なくするように心がける。

【いちご】

＜生育の概況＞

病害虫防除員からの報告によると、生育は平年並～遅い。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 1月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 0.5%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないため、本病の発生を助長しない。

防除対策

- ・ 本病は気温が 20℃前後、多湿条件下で多発生するため、施設内の多湿、植物体の結露は、本病の発生を著しく助長する。循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等で湿度を管理し、耕種的な対策を行う。
- ・ 曇雨天が続く場合は、施設内の多湿を避けるために薬液散布でなく、くん煙剤を利用した防除を行う。
- ・ 株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉や不要な果梗枝の除去を適切に行う。また、発病した果実や茎葉は有力な伝染源となるため速やかに除去し、ほ場外で処分する。
- ・ 発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 1月上旬の巡回調査では、一部ほ場で多発していたことから、平均発病株率は 1.2%（平年 1.0%）と平年よりやや多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より低いいため、本病の発生を助長しない。

防除対策

- ・ 胞子の発芽適温は 20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため、予防に努める。
- ・ 株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉除去を適切に行う。
- ・ 発病した果実や茎葉は有力な伝染源となるため、速やかに除去し、ハウス内に放置しない。
- ・ 多発生すると防除が困難であるため、初期発生に注意し、発病が確認されたら速やかに防除を行う。
- ・ 発生状況及び防除対策については、[「技術情報第5号（いちご うどんこ病）」](#)も参照する。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 1月上旬の巡回調査では、平均発病株率は 0.1%（平年 1.3%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より低いいため、本病の発生を助長しない。

防除対策

- ・本病の生育適温は 28℃前後であり、高温・多湿条件下で発生しやすい。
- ・厳冬期も緩やかに病徴は進展するため、新たな発病に注意する。また、開花、着果により株に負担がかかると萎凋症状が急速に進展する場合がある。
- ・発病株から周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し、発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・発病株は培土も含めて抜き取りほ場外へ出す。放置残さは伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせるなど、適切に処理を行ってから処分する。
- ・本病原菌は水滴の飛散等によって伝染する。薬剤散布も伝染を助長する可能性があるため、散布前にはほ場の見回りと発病株の抜き取りを徹底し、発病株への散布は行わない。
- ・薬剤感受性の低下が疑われる剤（MBC 殺菌剤（FRAC: 1）、QoI 殺菌剤（FRAC:11））の散布は避け、薬剤耐性リスクの低い保護殺菌剤（FRAC:M1～11）を使用する。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・1月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は 1.6%（平年 2.2%）と平年よりやや少なかった。
- ・地域別の平均寄生株率は、東部で 0.2%（平年 1.2%）、中部で 1.0%（平年 4.6%）、中遠で 3.6%（平年 0.8%）と、中遠では発生が多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より低いため、本種の発生を助長しない。

防除対策

- ・本虫は花を好んで寄生する。花における発生状況をよく観察し、本虫の寄生が認められた場合は少発生うちに防除する。また、必要のない花は摘み取った後、ほ場外に持ち出し、ビニール袋で密閉するなどして適切に処分する。
- ・施設内外の雑草や花き類は、本虫の発生源となるため開花前に除去する。なお、開花後の雑草等の除去は、本虫の飛来を助長するため注意する。
- ・天敵製剤を利用する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。
- ・発生状況及び防除対策については、[「技術情報第6号（いちご アザミウマ類）」](#)も参照する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・1月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は 0.9%（平年 1.6%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より低いため、本種の発生を助長しない。

防除対策

- ・冬期は施設内への侵入は少なくなるが、新葉等における寄生状況を観察し、初期防除に努める。
- ・天敵製剤を利用する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・1月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は 12.9%（平年 14.2%）と平年並だった。
- ・地域別の平均寄生株率は、東部で 1.3%（平年 10.1%）、中部で 7.6%（平年 20.4%）、中遠で 30.2%（平年 12.2%）と、中遠では発生が多かった。

- ・いちご病害虫防除員 6 名からの報告によると、本種の発生について 3 名が「やや多い」、1 名が「多い」と回答した。
- ・1 か月予報では、気温は平年より低いため、本種の発生を助長しない。

防除対策

- ・寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、天敵や気門封鎖剤を利用する。なお、気門封鎖剤の多くは卵への効果が低く残効性が期待できないため、5 日間隔程度で連続散布する。
- ・天敵製剤を利用する場合は、ハダニ類及び天敵の発生状況をよく観察する。ハダニ類の発生が多い場合には、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

【稲】

<その他病害虫>

●スクミリングガイ（ジャンボタニシ）

防除対策

- ・県内全域で分布が拡大している。未発生地域への人為的な貝の持ち込みを防ぐため、トラクター等の農業機械を使用する際は作業するほ場の順番を考慮するとともに、既発生ほ場から土が移動する危険がある場合には農業機械を洗浄するなどの対策をとる。
- ・昨年 7 ～ 9 月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。
- ・本種は低温に比較的弱い、土中の貝は生き残るため、2 月中にロータリー耕を行い、越冬貝を粉砕する。ロータリー耕は細かく、また回数が多いほど効果が高い。
- ・周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を粉砕する。
- ・スクミリングガイには、人体に有害な寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめる。

【小麦】

<その他病害虫>

●うどんこ病・赤さび病

- ・昨年 5 月中旬の巡回調査では、うどんこ病の平均発病株率は 12.2%（平年 20.2%）と平年より少なかった。また、赤さび病の平均発病株率も 1.8%（平年 15.1%）と平年より少なかった。
- ・本県の奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病にやや弱く、「イワイノダイチ」、「農林 61 号」より赤さび病も発生しやすい。またうどんこ病の第一次伝染源は、前年の被害残さで越冬した病原菌であり、赤さび病の第一次伝染源は、ほ場に落下した穀粒で越冬した病原菌である。よって前年多発したほ場では発生に注意する。
- ・窒素肥料の過多を避ける。

【茶】

＜その他の病害虫＞

●赤焼病

- ・病原菌は細菌であり、主に暴風雨によって伝染し、傷口から感染する。また、本病は寒害、凍害によって発生が助長されるため注意する。
- ・常発ほ場では予防的に薬剤散布を行うことが望ましい。特に、幼木園や、「つゆひかり」、「おくひかり」などの品種は本病に弱いため注意が必要である。

3 季節予報

● 1 か月予報 （東海地方 令和 8 年 1 月 2 2 日 名古屋地方気象台発表）

【予報期間】 1 月 2 4 日から 2 月 2 3 日

【予想される向こう 1 か月の天候】

特に注意を要する事項		期間の前半は、気温がかなり低くなる可能性があります。また、向こう 1 か月は、降水量が少ない状態が続くでしょう。
向こう 1 か月	天候	平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、低い確率 5 0 % です。
	降水量	降水量は、少ない確率 5 0 % です。
	日照時間	日照時間は、多い確率 5 0 % です。
1 週目	気温	1 週目は、低い確率 6 0 % です。
2 週目	気温	2 週目は、低い確率 6 0 % です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多 %
1 か月	気温	5 0	3 0	2 0
1 か月	降水量	5 0	3 0	2 0
1 か月	日照時間	2 0	3 0	5 0
1 週目	気温	6 0	3 0	1 0
2 週目	気温	6 0	3 0	1 0
3 ～ 4 週目	気温	3 0	3 0	4 0

【予報の対象期間】

1 か月 : 1 月 2 4 日（土）～ 2 月 2 3 日（月）
 1 週目 : 1 月 2 4 日（土）～ 1 月 3 0 日（金）
 2 週目 : 1 月 3 1 日（土）～ 2 月 6 日（金）
 3 ～ 4 週目 : 2 月 7 日（土）～ 2 月 2 0 日（金）

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の 3 つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020 年の 30 年間における各階級の出現率が等分（それぞれ 33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の 2 分の 1 より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病虫害防除所 〒438-0803 磐田市富丘 678-1

TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL <https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>